



みどりの東北

MIDORI no TOHOKU

平成20年10月

No.55

発行／東北森林管理局
秋田市中通五丁目9-16
TEL.018(836)2191

<http://www.tohoku.kokuyurin.go.jp/>



太平山（標高1,170m）

太平山（たいへいざん）は、秋田県中央部、秋田市・上小阿仁村にまたがる山で、太平山を中心に太平山県立自然公園に指定されています。

山頂（奥岳）には太平山三吉神社の奥宮と奥宮参籠所（宿泊施設もある山小屋）もありましたが参籠所は今年の9月22日に火災のため焼失しました。

麓には今年5月にリニューアルオープンした仁別森林博物館や太平山リゾート公園があり、紅葉がはじまるこの時期は温泉と登山を楽しむ人々で賑わいを見せます。

写真は秋田市仁別妙見山から太平山リゾート公園・太平山（写真中央上）を撮影。

（写真提供：仁別森林博物館ボランティア案内人 沓沢周弘氏）



紅葉の仁別森林博物館と灌木園

トピック

特集

「災害復旧が本格化」

企画調整室

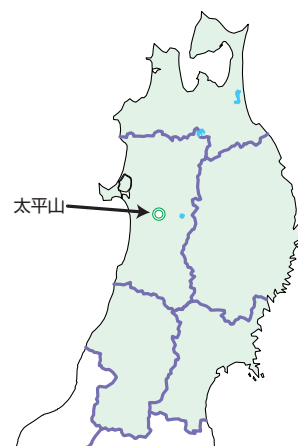
美しい森林づくり

「身近な資源カラマツ材の活用を目指して」

岩手県岩手郡滝沢村（有）仁和木材

我が署の隠れた名所

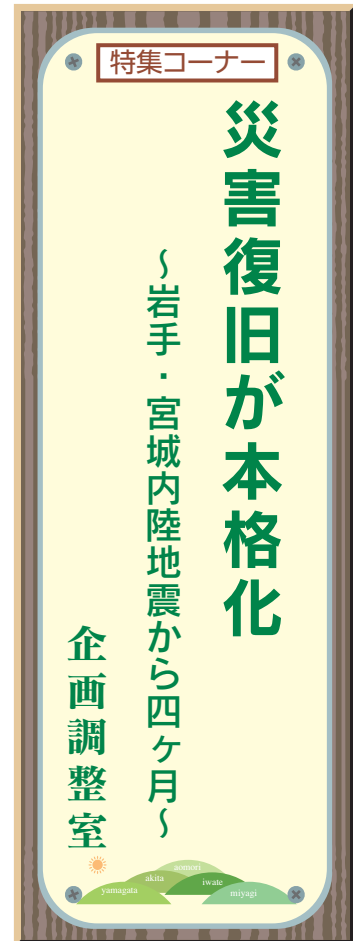
三陸北部森林管理署久慈支署「塩の道」



環境に優しい大豆油インキを使用しています。



東北森林管理局では、日本の森林を育てるために間伐材を積極的に使用しています。



【被害状況】

六月十四日に発生した岩手・宮城内陸地震により、大規模な地すべりや土石流、山腹崩壊が発生し、岩手県、宮城県を中心に、林野関係だけでも一十億円を超える、大きな被害となりました。

【災害復旧に向けた取組】

東北森林管理局では地震発生直後から、局・岩手南部森林管理署・宮城北部森林管理署に災害対策本部を設置するとともに、管内各署だけでなく、全国から延べ四百九十三名を、震災対応を行う両署や、政府現地対策本部・栗原市対策本部などに派遣し、復旧対策等を進めてきました。

これまで、下流域の安全確保の

企画調整室

ための警戒避難支援対策、迂回路

として機能する林道の復旧など応急対策を進めるとともに、四十六ヶ所約百十八億円に上る治山対策や、十八路線約九億円の林道の復旧対策など、あわせて約百二十七億円の災害復旧対策に取り組んでいるところだ。

また、地形や地質、土砂災害など、専門的な見地から復旧対策の検討を行うため、学識経験者等により、山地災害対策検討会（座長・宮城豊彦東北学院大学教授）を七月十二日から開催し、八月三十日の第六回検討会で、中間とりまとめを行い、規模の大きな荒砥沢地すべりなど一部を除き、今後治山対策の方針を打ち出したところだ。

【主な災害復旧対策】

① 一迫川上流（花山湖上流）

（宮城県）

千三百九十一万³m（東京ドーム約十三杯分）の不安定土砂量がある、一迫川上流域では、小河原地区等で土留工を実施したほか、河原小屋沢地区や湯ノ倉上流で治山ダムを設置していくこととします。

② 荒砥沢地すべり（宮城県）

今回の地震による最大規模の地すべりである、荒砥沢地すべりについては、複雑な地すべり機構を解明した上で対策を行う必要があることから、地すべり地内のボーリング調査を進め、復旧対策を計画することとします。

③ 産女川上流（岩手県）

八百九十五万³m（東京ドーム約七杯分）の不安定土砂量がある、産女川上流域では、土砂固定効果の高い大型の谷止工を設置することとしています。

【復旧体制の整備】

災害復旧対策の本格化にあわせ、九月から岩手南部森林管理署・宮城北部森林管理署両署に六名の担当職員を増員配置するとともに、特に被害の大きかった宮城県栗原市に「宮城北部森林管理署宮城山地災害復旧対策室」を設置し、対策室長ほか職員六名により、宮城県内の山地災害復旧事業の実行と関係者との連絡調整を行います。被災地の早期復旧を目指し、取り組んで参ります。



対策室職員による現地調査

宮城県内の対策



河原小屋沢地区の渓間対策のための資材運搬路の作設



小河原地区の崩壊土砂流出防止のためのカゴ砕土留工



シツミクラ沢地区の河道開削工事

岩手県内の対策



応急対策として尿前川地区に河道開削工事を無線操縦の無人バックホーで実施



完成したカゴ砕治山ダム工



対策室事務室開きでの看板設置
写真左から福田林野庁国有林野部長、佐藤栗原市長、江坂対策室長



速やかな復旧・復興に取り組みます（対策室内で職員一同）
後列右から小林青森事務所長、山崎局長、福田林野庁国有林野部長、石井局森林整備部長、堀井宮城北部森林管理署長

身近な資源カラマツ材の活用を目指して

岩手県岩手郡滝沢村(有)仁和木材

◆兵隊の位で将校に昇級したカラマツ

カラマツは春の芽吹き、夏の緑の美しさ、晩秋の眠気を誘うような黄色のやさしさと、春秋夫々に目に楽しい。

しかし、景観とは別に材質は誠に悪評の高いものであった。その主な原因は曲がり、よじれでとても製材用材としては使い物にならないとされてきた。樹齢五十年生以上の安定した材質のものが、一般的に出回ることがなかったせいにもよる。戦後の一斉、拡大造林では大半

は全国的にスギが植えられたが、岩手県ではスギ、アカマツ、カラマツの三樹種があい均衡しているのが特徴といえる。特にカラマツは県北地方に多く、その理由はスギの育たない場所でも育ち、しかも成長が早いことが魅力であったと推察される。

使い物にならない木を沢山植えてどうなるものかとさきやかれるほど将来を危惧するむきもあった。

しかし、時代の移り変わりは恐ろしいもので、その悪評のカラマツが、スギより四割も高い価格で引張だこの寵児になり、昔はスギが将校でアカマツは下士官、カラマツは二等兵であったものが、今やスギを尻目に堂々の将校に昇進した。これを予測してカラマツの植林を選んだ人がいたとしたら、大予言者であり称賛されてしかるべきである。

◆将校になったカラマツのお手柄

集成材、合板材と、かつての無垢材オンリーから工業化された集成材の時代に移行すること、木材の使用価値も、見てくれから強



多くなった工場土場のカラマツ間伐材

度が重要視される時代になった。主要な国内産の樹種でカラマツは断トツに強度があり、通直で大節の少ないことなどは工業化時代にうってつけの樹であり、その上、冒頭で述べた景観としての良さを考えあわせる時、正にお手柄な樹と言うべきであろう。

◆カラマツの製材加工への挑戦

戦後造林地は間伐の時期をむかえ、岩手県の県北に位置する当社の身の回りはカラマツが多く、今後豊富に出てくるカラマツの間伐材を、チップ材の確保とあわせて、米マツに負けない使い易い製品を作りたい一念から挑戦することにした。



ポイラーと増設した乾燥機

そのためには乾燥材にすることだと短絡的に考え、平成七年に乾燥機の第一号機を導入してカラマツ乾燥材の生産に挑戦した。しかし、古人の言う通り幼齢木の製品は、意図するところとはかけ離れたもので散々苦労した。幸い、ある大手のハウスメーカーから、小割材の受注があつて、角材よりはましな小割材を製作しながら勉強し、なんとか平角を含めた建築用構造材を商品化出来るようになり、

平成十年、十一年と乾燥機を二機増設した。

当初、間伐材が主で大きな平角をとる丸太に不自由したが、最近では五十年生前後の皆伐も入札に出るようになり大助かりである。

だが、やっと製材の過半数を乾燥材にして出荷出来る体制になったが、昨今海外からのカラマツの輸入が窮屈になり、合板各メーカーが国産材の集荷を争い高値となつて、製材原木としてはなかなか採算に合わない状況になってきた。

◆素材生産の場に若手の参入

国産材の成熟と利用度が高まる中で、山側の働く人手が高齢化などにより不足している現状をなんとか解決したい思いから、財団法人岩手県林業労働対策基金のご支援と、岩手県立盛岡農業高等学校のご理解の下で、十年前に学卒者を採用した。その後、平成十五年から農高新卒者を隔年に二名ずつ採用し、これまで八名となり、グリーンマイスターの取得者もすでに三名になった。残念ながら、入社後一年未満の者を含め三名が退職したが、残った社員は徹底した機械化で新しい林業をめざす使命感と誇りを持って頑張っていることは頼もしい。

カラマツの利用度が進むことと、若い戦士とともに停滞する林業の起爆材として頑張りたいと考えている。



「美しい森林づくり」に向けた取組

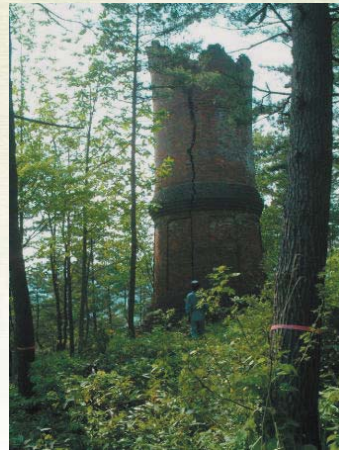
下北森林管理署

当署では「美しい森林づくり」に向けた取組として、地球温暖化防止対策としての間伐の推進や遊々の森を設定し、地域の小中学生へ体験林業の場の提供など様々な取組を展開しております。今回その取組について紹介いたします。

一、森林環境教育としての遊々の森「鉾山の森」の整備（川内町）

むつ市川内町に遊々の森「鉾山の森」を平成十六年度に設定し、地域の小中学生のための林業体験の場として活用されてきたところ

ですが、地域の小中学生に森林・林場はもとより、川内町の歴史の中で大きな位置づけにあった安部城鉾山（当時我が国有数の鉾山）についても併せて勉強ができる場



整備を進めている「鉾山の森」

とするべきではないかとの行政の意向や民意が盛り上がりました。このためむつ市、地域の有識者、地元住民、管理署等が連携して取り組むこととなり、整備に当たって①森林・林業の体験学習がより安全で、②鉾山と地元との関わりや精錬の結果荒廃した林地の復旧の歴史等が一目で学習でき、③かつ地域から現存する鉾山の煙突の遠望がきく一方で、煙突等の周囲ができる歩道の整備を行うことになりました。

また、整備にあたっては、関係者や地域の小中学生はもとよりボランティアの協力を得つつ、地域が一体となつて、歩道の整備や必要な看板の設置などが順次進められており、正にむつ市川内町のシ

ンボルとしての遊々の森「鉾山の森」の整備が進められています。

二、地球温暖化防止対策としての森林の整備・列状間伐の推進

間伐の推進は、地球温暖化防止の観点からも喫緊の課題であり、当署においても、積極的に取り組みを進めているところです。

特に、列状間伐による伐採量は、平成十九年度約三千五百㎡から平成二十年度は約二万五千㎡に大幅に拡大し、取り組んでいるところ

です。なお、本年度当署管内の伐出業者二社に初めてスイングヤーダが導入される予定であり、列状間伐促進のための条件整備が進みつつあります。

また、列状間伐を民国で推進する観点から流域林業活性化センターと連携し、平成十八年度は署の実施箇所における現地検討会、平成十九年度は国有林をフィールドとして列状間伐設定勉強会、平成二十年度はスイングヤーダなど高性能林業機械による列状間伐実施箇所の視察等を企画し、その理解の促進に努めているところで

三、合板等用材の船輸送

昨年、住宅建築確認の遅れや、サブプライムローン問題が我が国

木材産業に影響を及ぼす中、

これまで木材の輸送はトラック主体でしたが、王子木材緑化（株）では、下

北産スギ

材を船で輸送しています。むつ市大平岸壁に集められたスギ材等は、一船当たり約千三百㎡が積み込まれ、遠くは鳥取県まで運ばれ、合板用材として消費されています。計画では毎月一船程度の輸送を予定し、原木は当署の立木販売の購入を基本に集材を進めております。

船での木材の輸送は全国で始まりつつありますが、下北産スギ材の販路の拡大と有利販売、間伐の促進への貢献はもとより、船輸送（輸送改革）に伴う化石燃料の消費削減など地球温暖化防止の取り組みの一つとして期待しています。

一方、下北地方にチップ工場建設の検討も進められており、実現すれば、地域の未利用資源の有効利用面でも大きな役割を果たすものと期待されるところです。



温暖化防止と販路拡大に期待される船輸送

【森のお話】
…コラム…

ケヤキ・ブナ等の広葉樹優良木クローンを保存しています
優良広葉樹育種推進事業の進展状況

森林総合研究所 林木育種センター 東北育種場

半田 孝俊

森林の有する多面的な機能の発揮、生物多様性の保全等森林に対する要請の多様化に応じた森林の整備のため、広葉樹の優良種苗の確保が求められています。

東北育種場では、平成十年度からの十カ年間の「多様な優良品種育成推進事業」の「優良広葉樹育種推進事業」により管内の四県と連携して広葉樹優良形質候補木の選抜、増殖を進めてきました。

昭和四十八年度から精英樹選抜育種事業によりブナの精英樹が五十一選ばれ、育種場内に三十八クローンが保存されています(写真―1)。

広葉樹の造林に使用する苗木の産地に関心が高まり、その地域のものを使うということが時流となりましたが、本事業は育種による種子の生産を目指しています。

選抜した候補木は育種場内に接ぎ木クローンでブナ五十一、ケヤキ百四、クリ十三、イヌエンジュ十クローンを保存していますが、まだ選抜数に対して半数に満たなく、各機関と連携して鋭意保存を進めているところです(表―1)。

表-1 広葉樹優良形質候補木の選抜状況(平成19年度末)

選抜機関 \ 樹種	ブナ	ケヤキ	その他**
東北森林管理局*	51		
東北育種場	20	92	
青森県	25	32	
岩手県(県単独)		22	
宮城県		50	138
秋田県	22	22	44
合計	118	218	182

* 東北森林管理局のブナは精英樹

**はクリ、イヌエンジュ、ミズキ、ホオノキ、ハリギリ、ウダイカンバ、ミスメ、キハダ



写真-1 昭和55年に設定したブナ育種素材保存園 (クローンで保存する林)



写真-2 昭和58年に設定したブナ採種園

日本で唯一のブナ採種園

昭和五十八年日本で初めてのブナ精英樹三十八クローン(現在三十七クローン)による採種園(種採り専用の林)を造成しました(写真―2)。この採種園の観察では二クローンが毎年着花する特異な性質があり、着花性を支配する遺伝子を解明する研究に取り組んでいます。

モデル採種林の造成

育種場が岩手県内から選抜したクローンでモデル採種園を平成十八年春設定しました(写真―3)。平成二十二年度には青森県、宮城県及び秋田・山形の二県内から選抜したクローンを単位として三箇所のモデル採種園を造成する予定です。早く花が咲いて種が採れることを期待しています。平成十三年に植栽したケヤキは今年始めて着花を観察しました(写真―4、5)。



写真-3 (上) 平成18年春設定のケヤキモデル採種園
写真-4 (左上) 平成13年設定のケヤキ育種素材保存園
写真-5 (左下) ケヤキの花 右半分に雌花、左半分に雄花が着いている





職場体験学習を実施

最上支署

毎年、当支署が所在する真室川町の真室川中学校では進路学習の一環として、地元事業所等での「職場体験学習」を実施しています。

今回、森林に興味があり将来は森林に関わる仕事に就きたいという希望を持った三年生の男子生徒一名が、九月八日から十日までの三日間、当支署で職場体験をしました。これまでで初めてのことです。

体験内容は、単に事務室で仕事を



支署職員の指導を受けながら収穫調査を体験

するよりも、木がどのようにして市場に出るのかなど、できるだけ森林や現場を知ってもらう方が有意義と考え、収穫調査を実際に体験し、その後、生産請負の伐採現場と、庄司製材所のご協力を得て、製材工場を見学してもらいました。収穫調査では、職員からの安全指導をしっかりと守り、汗を流し蚊と戦いながら一生懸命にがんばりました。生産の現場や製材工場では今まで見たこともない機械に興味深げでした。

このほか、自分の住む真室川町のブナ林、貴重な巨樹・巨木に触れ、自然の豊かさを実感していました。

また、全国的にみても規模の大きい当支署の銅山川地区の地すべり対策を見学し治山事業の重要性などの説明を熱心に聞いていました。

生徒は、緊張の毎日で心身ともに疲れたと思いますが、出勤、終業時もきちんと挨拶でき、立派に三日間の体験学習を終えました。将来、この経験を生かして、希望が変わらずに森林に関わる仕事に就いてもらいたいと願っています。

眺望山へ全校遠足！

青森森林管理署

青森市立奥内小学校の全児童九十七名が、九月二十六日に眺望山自然休養林を訪れました。

この日は、今にも雨が降り出しそうな空模様の中、高学年生が低学年生を引率し、学校から眺望山までの七キロメートルの徒歩遠足です。児童達は、普段見る車の中からの風景と違い、直に樹木や稲の香りを感じながら疲れた様子もなく休養林管理棟前に無事到着。

午前中は、署の職員が一年生から三年生を対象に「森林教室」、四年生以上を対象に「枝打ち体験」を実施する予定でしたが、天候が悪いため枝打ち体験を中止し、今年六月にボランティアによって整備された「ウッドチップ広場」で全児童を対象に



雨の中でも元気いっぱいの子供たち

森林教室を行いました。途中、雨が降り出し、雨合羽を着ての教室となりましたが、児童達は、雨をもともせず、森林の働きや育て方などの話に熱心に耳を傾けていました。また、敷き詰められているウッドチップのクッションのような感触に非常に興味を持った様子でした。

管理棟の中でお弁当を楽しんだ後、午後からは学年単位で自然観察会。眺望山の頂上には行くことはできませんでしたが、ヒバの大径木に目を見張り、クリやドングリを両手に抱えるくらい集め、「今度は家族と一緒に眺望山の頂上へ登りたい」などと、終始、児童達の歓声と笑いの絶えない一日となりました。

最後に、教頭先生から、来年も全校遠足で眺望山を訪れたい旨のうれ

しい要望もあり、当署では、引き続き森林とのふれあい活動に取り組みでいきたいと考えています。

森林の大切さと治山事業に興味津々

(上郷小学校での森林教室)

由利森林管理署

九月十一日(木)、にかほ市立上郷小学校五年生十五名を対象に、森林教室を行いました。秋田県にかほ市には、奈曾川・白雪川という生活に密着した河川がありますが、過去に大災害が発生し、直下集落に被害をもたらした記述も残っています。森林教室は、上郷小学校からの要請を受け平成十八年度から開始し、今年



職員の説明を熱心に聞く児童たち

で三回目となりました。

当日は天候に恵まれ、白雪川治山工事現場にて森林の大切さと治山事業の関わりや、治山ダムの目的等を説明。その後、施工中の現場や既設ダムの現状を見学しました。

児童からは「自然災害の起きやすい条件は?」「治山ダムはどのくらい(金額・期間)で完成するんですか?」「世界で森林の多い国はどこですか?」「や」「治山ダムは全国に何基あるんですか?」など、講師泣かせの質問も寄せられ回答に困る場面もありましたが、講師の回答を真剣に聞き入りメモをとる姿が印象的で、理解を深めてもらうことができたと思



児童からも理解が深まったとお礼の言葉がありました

を強くしました。

最後に、児童を代表して佐藤里緒さんより「森林の大切さや治山事業のことがよく分かり、私たちの生活を守ってくれていることも分かりました。」とお礼が述べられ、森林教室を有意義に終了しました。

後日、治山ダムに掲示する標語募集を依頼し、治山ダムが完成する頃には、児童の標語が記載された堤名板が治山ダムに設置されることとなります。

新任者略歴紹介(9月1日付)

宮城山地災害復旧対策室長

江坂 文寿 (愛知県)



- 62・4 農林水産省入省
- 13・1 林野庁治山課課長補佐(施設計画班担当)
- 14・8 東北局治山課長
- 18・4 " 計画課長
- 19・9 林野庁計画課課長補佐(設計基準班担当)

東北森林管理局

1階ロビーのご案内(10月)

- ・ミニギャラリー
手作りハウス作品展

秋田市 渡部 孝子

- ・PRコーナー
木づかい推進月間

販売課

【訂正とお詫び(九月号)】
11ページ二段目「各地からの便り」上小阿仁支署の19行目「二酸化炭素を固定すること」は、「二酸化炭素の測定方法等について支署職員の説明を受け勉強したり、」に訂正。



盛岡森林管理署

国有林・民有林技術
検討会を開催

八月二十五日(月)、北上川上流域森林・林業活性化センターは、「アカマツ天然更新箇所における針広混交林化等の促進」をテーマに国有林・民有林技術検討会を開催し、岩手県・当署職員・活性化センター関係者約二十名が参加しました。

アカマツは、御堂松と呼ばれる当流域の主要樹種ですが、森林の有する多面的機能を一層発揮するためにも、また、盛岡市近郊まで北上しているマツクイムシ被害に強い森林を整備するためにも、針広混交林化を促進することが重要な課題となつています。このため、天然下種更新して九



アカマツ林型プロットでの現地確認

年経過した北上山国有林(岩手県岩手町)のアカマツ林分において、アカマツ及び広葉樹の生育状況等による林型タイプ別に設定したプロットを現地確認し、針広混交林化を促進するための保育技術等について意見交換をしました。その後、会場を移して、「次代検定林(各地の精英樹系統の試験地)」及び「松森山御堂松植物种群落保護林」を視察しました。

県担当者からは、アカマツ施業については、マツクイムシや雪害等に対し技術的な面からいろいろと検討しており、また、貴重な保護林等を間近に見ることができて、大変参考になりましたとの意見がありました。なお、次回の技術検討会は、十月に、「過去に列状間伐を実施した箇所の定性間伐」をテーマに、民有林及び国有林をフィールドとして行う予定です。

仙台森林管理署

「キリン北蔵王水源の森
づくり活動」実施

九月二十日(土)に、昨年法人の森林として契約された川崎町小屋沢山国有林において、キリンビール(株)仙台工場主催による「キリン北蔵王水源の森づくり」育林活動が開催されました。

キリンビール仙台工場では、工場の水源地である川崎町の国有林で「水源の森活動」を実施しているもので、今年も川崎町の住民と一緒に活動をすべく公募で参加者を募りました。当日は、公募で参加の川崎町在住の二十二名を含む総勢約百三〇名の参加となり、小雨交じりの天気の中、開会式が始まりましたが、雨もすぐに収まり涼しく穏やかな一日となりました。

開会式には地元川崎町の佐藤町長、高原仙台森林管理署長が来賓として出席、また、育林活動の作業指導等で「宮城森の会」及び「川崎町森林組合」が参加し、更に今回はチェンソー彫刻の実演で、「里山ねつと赤坂」代表の和田伸太郎氏が参加し、キリンの環境活動シンボルキャラクター「エコジロー」を製作されました。

育林活動は、午前中に「枝打ち」と「樹名板取り付け」を実施し、参加者は慣れない作業で、高枝切り鋸



エコジロー製作の実演

で悪戦苦闘したり、ケヤキの大木に樹名板を付けようと五・六人がかりで頑張っていた組もありましたが、みなさん作業後は充実した表情でした。また、午後はキリンビール仙台工場の工場見学が実施されました。



5~6人がかりで樹名板を取り付けたケヤキ大木



“開かれた国民の森林を目指して”

—地域に密着した各種イベントを実施—

由利森林管理署 矢島森林事務所

東屋 幹男

矢島森林事務所は、秋田県南端、由利本荘市にあり、国定公園に指定されている鳥海山の北山麓一帯の国有林9,800haを管理。鳥海山から由利原高原、日本海という山と海の雄



ブナ保護林

大なパノラマをなしており、四季を通じて多くの観光客が訪れています。また、国有林内には鳥海山獅子ヶ鼻湿原植物群落や鳥海ブナ施業公園等がありレクリエーションの場として、加えて子吉川等国有林を源流とする河川も多く、市民の水瓶としての役割も担っております。最近においては当事務所管内にある桑ノ木台湿原が新聞や雑誌等に大きく紹介され入り込み者が急増。当湿原の保全か保護かの論議がなされる等、地域住民の国有林への関心は日増しに高まっております。

こうした状況の下、森林整備の推進はもとより、開かれた国民の森林を具現化するために、如何に地域の人々との接点を見いだしていくかが課題でありました。このため「もっと開かれた、もっと親しみのある国有林」をモットーに地域に密着した各種イベントを積



高校生の森林教室（鳥海山をバックに記念写真）



森林浴ツアー（前列右端が筆者）

極的に実施しております。今年度、現在までに取り組んできた一端を日誌を紐解きながら紹介させていただきます。

6月4日、一般公募で募集した24名の参加者の下、国有林見学会を開催。初夏を思わせる陽気の中、午前中は獅子ヶ鼻湿原を散策。マイヅルソウやツクバネソウ、チゴユリ等咲き乱れ参加者の感動を呼んでいました。午後は鳥海山5合目へと移動。まだ残雪が残る中、マンサクの花や可憐なミネザクラが出迎えていました。自分自身植物には明るいと自負。自称インストラクターとして説明を行いました。初めて参加者より「国有林の知らない一面を垣間見ることができた。当行事は今後も積極的に行ってほしい。」とのコメントが印象に残っております。

6月13日、当日は快晴の下、矢島高校1年生75名を対象に森林教室を開催。竜ヶ崎湿原を散策後、最大の学習テーマであるブナ保護林及びブナ二次林の見学を行いました。生徒達はブナという樹種は知っていたが、実際にブナと接したのは初めてといい、生育途上のブナ林や以前手を加えたブナ林、原生的雰囲気保護林等を散策し、ブナ林の生態や働きについて耳を傾けていました。先生より、秋にも是非当環境教育をお願いしたいとの申し出があり、秋の開催を約束し有意義に終わりました。

この他、7月31日には、先述した桑ノ木台湿原検討委員会の先生方の現地案内を行う等対外的な接点として、イベントを通じた国有林のPRや案内板の整備に努めているところです。私の国有林マン人生は今年度末で終止符となりますが、一日生涯の想いで仕事に取り組んでいる毎日です。



“自然と人と動物が作り出した森 安比高原”

岩手北部森林管理署 新町森林事務所

松尾 亨

今年も安比の森に子どもたちの歓声がこだましている。ここ安比高原では旧安代町の5年生が総合学習の中で、八幡平のなり立ちや、植物の観察、体験林業や二酸化炭素吸収実験などを通して年4回の森林について学ぶ場でもあります。

今回紹介の岩手北部森林管理署では、地域発案システムのテーマを「森林環境教育の推進と実践マニュアルの作成」で取り組んでいます。小学校の先生方と相談しながら、総合学習の時間や理科や国語などの学習と連携した森林学習を行っています。安比高原を管轄する新町森林官もその一翼をになっています。

森林学習に取り組む子ども達にすれば、日常にない活動を森の中で経験し、森林の働きを実感することは、教室で勉強することより遙かに楽しそうなのは確かなようです。この森林学習で子ども達を惹きつけた楽しい授業を行うためには、実験用具の改良、新しい話ネタや、ネイチャーゲームのバージョンアップ等、隠れた森林官の工夫があります。苦勞する代わりにこちらでも勉強になります。

さて、安比高原のことを少し紹介させていただくと、十和田・八幡平国立公園の八幡平エリアの北側に位置し、APPIスキー場の西側に



レンゲツツジが美しい初夏の安比高原

あります。標高600m~1100mで、周辺の2次林も含め約450Haの広さです。シバ草原とブナ・ミズナラの二次林からなる一体をさして呼んでいます。

二次林のほとんどは、大正時代末期から昭和30年代に伐採された林で、昭和の終わり頃まで、牛馬の放牧が行なわれており、草地の確保のため人間よる、火入れ・柴刈り等の管理がなされてきました。このことにより、レンゲツツジ・オキナグサ・アズマギクなどシバ草原特有の植物と景観が保たれ、また、牛馬の踏圧によるチシマザサの処理でブナ二次林が構成されたと考えられます。

さて、この高原が目ざされ始めた歴史は意外に新しく、平成のはじめ頃、ヤナギランの群

落やブナ二次林の四季を通した植物観察など、美しい景観を広く町民に楽しんでもらう目的で、当時の安代営林署と安代町で協議し、ブナ二次林の遊歩道整備や、ブナの駅の開設など利用しやすくしたことから、リゾートAPPIの夏の憩いのフィールドとなりました。

しかし、それから10年ほどすると、人間と動物の利用がなくなってきたシバ高原は、やがてチシマザサやダケカンバの進入、ズミの拡大等で、当時の景観が失われはじめ、奥の牧場はシバ草地の半分以上がササと中小径の林になってきました。

このことを何とかしたいという地元の声に応じて、平成18年に「あっぴ高原」遊々の森を八幡平市と設定し、安比高原の景観を市民や子ども達との森林学習の中で考え、将来に向けて維持できるように、子ども達を含めた市民参加の柴刈りやズミ焼却を実施、植生が回復してきました。(バイオマスエネルギーの学習で焼き芋にも利用しています。)

次代を担う子ども達に、自然と人と動物たちとの共生や共存が大切であることを、体験し学ばせながら、私自身も子ども達や多くの地域の方々、営林署時代からの先輩の知恵と工夫を改めて学びました。岩手北部森林管理署が地域の声を大切にしたエコ学習に一役買っている一面には、森林が地球環境を守ることに一役担っているように、未来を作る子ども達が「自然と人と動物の作り出した森」を感じて心の成長を促していきながら、森林管理署が地域との関わりを大事にし、さりげなく「地球と森林の関係」のように自然体で地域に必要な組織であってほしいと考えます。日々の業務に追われながらも、子ども達の笑顔に会う度とても幸せな気持ちになります。

皆さんも機会があればぜひ遊びに来てください。



野外での森林環境教育（中央講師が筆者）

我が署の 隠れた名所

三陸北部森林管理署久慈支署

「塩の道」

(見所の概要)

当支署管内には久慈市山形町平庭から野田村に至る「塩の道」と呼ばれる道があります。昔、野田地方で製塩された塩は牛の背に乗せられ、盛岡や沢内遠くは鹿角まで運ばれたことから「ベコの道」とも云われています。その道の多くは現在主要地方道野田山形線となり、一部は歩道のまま跡を留めています。ここではあちらこちらに「塩の道」の道標を見つけることができます。



野田村十府ヶ浦には起点の石標、久慈市山形町には案内図、その他数箇所に標柱があり、国有林内の白石峠には一里塚の標柱もあります。

先人が牛と共に何百年も踏み固めた生業の古道であり、文化交流の道です。森林の中の澄んだ空気の下、往時を偲びながらゆっくりと「塩の道」を訪ねてみてはいかがでしょうか。

陸中野田駅で販売している「のだ塩ソフト」もお勧めです。



交通アクセス

国道281号・平庭高原を南方に曲がり野田山形線に入り、関、小国を經由し山根町へ、下戸鎖から東方へ曲がり白石峠を経て野田村へ

【訂正とお詫び】(9月号)

14ページ「我が署の隠れた名所」の交通アクセスは、「JR田沢湖駅から18km、車で30分、徒歩5分、国道341号から尻高林道200m、徒歩5分」の誤りでした。



お問い合わせ先

〒028-0001 岩手県久慈市夏井町大崎14-12
電話番号：050-3160-5905 FAX：0194-52-2653